

<翻訳>

『集合体現形 (Aggregate) に関するワーキンググループ最終レポート』 翻訳

IFLA Working Group on Aggregates 著

橋詰秋子, 小林美貴 翻訳

本稿は、国際図書館連盟 (IFLA) FRBR レビューグループにより設置された「集合体現形に関するワーキンググループ (Working Group on Aggregates)」が発表した最終レポートの日本語訳である。

IFLA Working Group on Aggregates. Final Report of the Working Group on Aggregates. IFLA, 2011, 20p. <https://www.ifla.org/wp-content/uploads/2019/05/assets/cataloguing/frbrrg/AggregatesFinalReport.pdf> (accessed 2023-09-17), CC-BY

IFLA Working Group on Aggregates

Chair: Ed O'Neill

Formation: The Working Group on Aggregates was created by the FRBR Review Group at their meeting in Oslo (2005).

Initial members: Ed O'Neill, Anders Cato, Paula Goossens, Judy Kuhagen, Barbara Tillett, Carol van Nuys, Maja Žumer

Current members: Ed O'Neill (USA, Chair), Anders Cato (Sweden), Eeva Murtomaa (Finland), Barbara Tillett (USA), Patricia Thurston (USA), and Maja Žumer (Slovenia)

資料のデジタル化の進展によって、粒度 (granularity) の細かさが異なる著作が様々な体現形で刊行されるというケースが顕在化した。ある論文集 (集合物) を構成する各論文 (構成物) が単行書として刊行されると同時に電子書籍化され、さらに電子書籍の一部を抜き出したお試し版が公開されることも珍しくない。こうした状況下で、粒度の異なる著作を目録上でいかに組織化するかという問題が注目を集めている。

このレポートは、こうした粒度の違いに関わる問題を扱っている。上記のワーキンググループは、2005年から2011年にかけて、FRBRモデルにおける集合体現形の取り扱いを検討し、レポート本文で示されたモデルを提案した。この集合体現形のモデルは、「IFLA 図書館参照モデル」(2017年刊行) に組み込まれている。

訳者らは本レポートの内容が日本の情報資源組織化研究にとって有用と考え、その内容を我が国で広く共有するために日本語への翻訳を行った。翻訳に当たっては、日本語としての分かりやすさを重視した。翻訳作業は極力注意深く進めたが、誤訳や誤植が残っている可能性がある。誤訳や誤植などがあれば、訳者までご指摘いただきたい。

序論

「書誌レコードの機能要件 (Functional Requirements for Bibliographic Records : FRBR)」が示す概念モデル¹⁾は、書誌的宇宙に対する新しい見方を提供している。情報を発見し集中させるという目録の目的は、情報資源 (resource) を形成する実体 (entity), あるいは情報資源に関連づけられる実体を指定することで達成可能となる。ユーザータスクを達成するには、ある創作者のすべての著作, ある著作のすべての表現形 (例えば, 利用可能な翻訳や版), またはある著作の特定の表現形のすべての体現形をグループ化することが不可欠となる。

「集合体現形に関するワーキンググループ (Working Group on Aggregates: WG)」では、まず文献レビューを行った。このレビューを通じて、IFLA FRBR ワークショップ²⁾以降、集合体現形の扱いにほとんど変化がないことが確認された。集合体現形には様々な異なる定義が存在している。それらの異なる定義は、集合体現形をモデル化する場面で、様々なモデル化手法とともに使われてきた。集合体現形に FRBR モデルを適用する際に直面する問題点や矛盾は、FRBR の一貫した実装を阻む障壁であり続けている。集合体現形は、重要かつ比較的一般的な FRBR の実体である。Bennett ら³⁾は、OCLC の WorldCat を調査し、複数の表現形を持つ著作のうち約 12% が集合体現形であることを明らかにした。

集合体現形の定義

集合体現形 (aggregate) を定義する場面では、FRBR の全般的なフレームワークが主な検討事項となった。FRBR の報告書は“扱うべき問題に対する最終解答”⁴⁾を示すものではないが、WG は集合体現形を FRBR モデルと矛盾しない形で定義する必要があると考えた。集合体現形に (直接的または間接的に) 関係する主な FRBR の原則は、以下のものである。

1. “表現形の範囲を定義する場合には、それ自体が著作の知的・芸術的実現にとって必須ではない書体やページのレイアウトのような物理的形式の側面は除外している。”⁵⁾
2. “表現形が、挿図、注、用語集等のような、著作の知的・芸術的実現にとって必須ではない増補 (augmentation) を伴う場合には、そのような増補はそれ自身独立した著作の独立した表現形であるとみなす。”⁶⁾
3. “一つの体現形のなかで具体化されている知的・芸術的内容が、実際はもう一つの体現形のなかで具体化されているものと同一あるいは実質上同一であることを示すためにも、表現形として定義する実体を利用することができる。物理的な具体化が異なり、その異なった体現形の属性が両者の内容が類似している事実を曖昧にしているとしても、この二つの体現形が同一の知的・芸術的内容を具体化している

のであれば、表現形として定義する実体を通して共通のリンクを張ることができる。”⁷⁾

以上の記述から、著作や表現形は体現形に具体化した時点で不変と考えられる。この原則は、表現形が抽象的な実体である以上、表現形の特徴 (property) はそれが具体化された体現形には由来しない、という考え方に基づく。表現形は著作から、体現形は表現形から、それぞれ特徴を継承するが、その逆はない。したがって表現形を識別するための基準は、表現形とその親となる著作の特徴にのみに基づかなければならない。異なる複数の体現形が同一または非常に類似した内容を具体化している場合、それらは同一の表現形が具体化されたものと捉えられる。この捉え方は、体現形の物理的属性に違いがあったとしても、表現形が他の異なる表現形と組み合わせられていたとしても同様である。

「表現形の実体に関する IFLA ワーキンググループ (IFLA Working Group on the Expression Entity)」⁸⁾ は、FRBR の報告書のうちの表現形に関わる部分について、修正案を提示した。この修正案では、ある著作に追加資料が加わって増補や補遺がなされた場合、それは同じ著作の新たな表現形として捉えることが提案された。しかし、この考え方には問題もある。古典作品が注記や序文、挿図等の組合せを変えて増補されると、古典作品自体の表現形は変わらなくても、その都度新たな表現形が形成されることになる。同じ著作の異なる表現形で明瞭な違いのないものが、数多く存在することになってしまうのである。

増補された著作をどのように扱うかという問題は、2007 年に IFLA 目録分科会が FRBR 報告書を改訂した時に解決に至った。この改訂は、“ある表現形が増補を伴う場合には...著作の知的・芸術的実現に必須ではない増補は、それ自身が独立した著作の独立した表現形であるとみなす”⁹⁾ ことを明記したのである。

FRBR という広い文脈でみると、集合体現形を定義する作業はそれほど複雑なものではなかった。WG で具体的な事例を検討した際、ある特定の情報資源が集合的実体 (aggregate entity) に該当するか否かについてのメンバーの認識はほぼ一致した。集合体現形の定義は、集合体現形として識別された体現形の特徴を踏まえて、“複数の表現形を具体化している 1 つの体現形”と規定された。この集合体現形の定義には、FRBR の実体群のすべての組合せやコレクションが含まれている訳ではない。この定義は、第 1 グループの実体に限定されており、個人 (person) や団体 (corporate body)、場所 (place) のコレクションやグループは含まれない。また、1 つの集合物として捉えられることもある個別資料のコレクションやグループも除外している。個別資料のコレクションを集合体現形の定義から除外することは、個別資料が 1 つの集合物として存在していない、また重要でないことを意味している訳ではない。それらが単に、FRBR の実体群の中で個々の組合せを表現しているにすぎないことを意味している。WG は、個別資料のコレクションが FRBR でどのように扱われるべきかを簡潔に検討しただけであり、上記で定めた集合体現形には該当しないという以外には、何も勧告していない。

WG は、集合体現形について、3 つの異なるタイプを確認した。それは、(1) 表現形の集合コレクション、(2) 増補による集合体現形、(3) 並列的表現形の集合体現形である。以下では、これらのタイプを本レポートの前提に沿って定義する。

表現形の集合コレクション (Aggregate Collection of Expressions)

コレクションとは、独立して作成された複数の表現形の集まりで、単一の体現形にまとめられて「出版された」ものである。コレクションには選集、アンソロジー、モノグラフ・シリーズ、逐次刊行物、その他の類似する情報資源のグループが含まれる。その例には、雑誌の各号 (記事の集合物)、単一の巻にまとめられて出版された複数の小説、独立して執筆された章で構成される図書、CD (個々の歌唱の集合物)、様々な形で収集・選集された著作集がある。コレクションに特有の特徴としては、特定の著者の小説のコレクションや特定のアーティストによる歌唱のコレクション、あるジャンルの詩を集めたアンソロジーのように、コレクションを構成する個々の著作はタイプやジャンルの点で類似することがある。しかし場合によっては、無作為な表現形のコレクションであるかのようにみえるものもある。

増補による集合体現形 (Aggregate Resulting from Augmentation)

増補の結果として生まれた集合体現形は、典型的には、単一の独立した著作に 1 つ以上の従属的な著作が追加されている点で、コレクションとは異なる。このような集合体現形が出現するのは、オリジナルの著作に不可欠なものではなく、かつオリジナルの表現形に実質的な変更をもたらさない追加資料が、表現形に補足されたときである。序文、序論、挿図、注釈などが増補の著作の例である。増補の資料は、“書誌的な識別に必要とみなされることもあるが、みなされないこともある”¹⁰⁾。

並列的表現形の集合体現形 (Aggregate of Parallel Expressions)

体現形には、同一著作の複数の並列的な表現形を具体化したものがある。単一の著作を別の言語で表した複数の表現形が単一の体現形に含まれるケースが、このタイプの集合体現形の一般的な形である。これらは、一般に多言語環境で出版されたマニュアルや政府文書で用いられる。並列的表現形は、利用者が選択した言語で同じ資料にアクセスできるようにしたウェブにおいてもよくみられる。他の例には、オリジナルの言語のテキストとその翻訳とで構成される出版物がある。並列的表現形は、少なくとも図書館の環境においては、集合コレクションや増補による集合体現形に比べて一般的でなく、注目もあまりされていない。FRBR 報告書では明確に議論されておらず、関連する研究もあまりない。

集合体現形のモデル化

以下の図 1 が表現形と体現形の間が多対多の関連があることを示しているように、FRBR

報告書¹⁾の図 3.1 は表現形が複数の表現形を含むことを明示的に認めている。

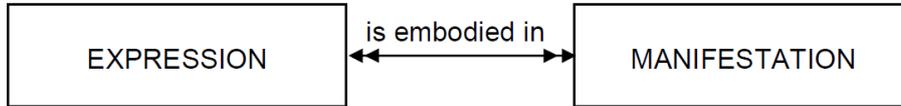


図 1 : 多対多関連

これは、第 1 グループの実体群の中では唯一の多対多関連である。図 3.1 で示される他の関連は 1 対多である。表現形は複数の表現形を具体化することができ、単一の表現形は複数の表現形に具体化される。これに対し、単一の表現形は単一の著作しか実現できず、単一の個別資料は単一の表現形しか例示することができない。

例えば、John Grisham が書いた 2 つの小説 *The Testament* と *A Time to Kill* は、*The Testament: A Time to Kill* というタイトルの一冊にまとめられて再版された。その結果できた集合的な表現形 (aggregate manifestation) は、図 2 が示すとおり、2 つの表現形を具体化したものと捉えられる。

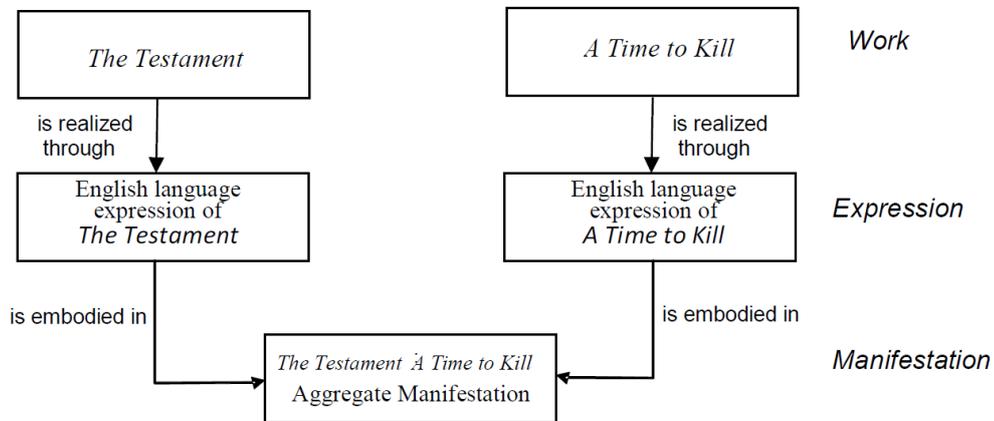


図 2 : *The Testament and A Time to Kill* のための集合表現形モデル

しかしながら、集合表現形を単に複数の表現形を具体化したものとしてモデル化すると、選集者や編集者による創造的な行為を認識できない恐れがある。表現形を集めるというプロセスは知的で芸術的な取組であり、それゆえ著作の基準に合致する。集合的な表現形を作成するというプロセスの中で、選集者は集合化著作 (aggregating work) を作成する。この集合化著作は、複数の表現形を集合表現形に変形させるための接着剤、綴じ、接合材とみなすことができる。この取組は、既存の 2 つの小説を合わせて出版するという比較的簡単にできるものかもしれないし、アンソロジーのような、単なる部分の総和以上の集合物を生み

出すという大きな取組かもしれない。集合化著作は、個々の章でもなければ、結果として生じる表現形の識別可能な部分でもなく、集められた複数の著作そのものでもない。

集合表現形を、複数の表現形を具体化した表現形としてモデル化することはシンプルで直接的である。著作と表現形は、出版形態や具体化された物理的な表現形にかかわらず、同等に扱われる。ある表現形は、単独で出版されることもあれば、他の表現形と一緒に単一の表現形として具体化されることもある。図 3 に、集合表現形の一般的なモデルを示す。集合表現形のために作られた新たな実体は、 n 個の表現形を具体化している。これらの表現形は、いずれも、集合的ではない表現形として個別に具体化されることもある。

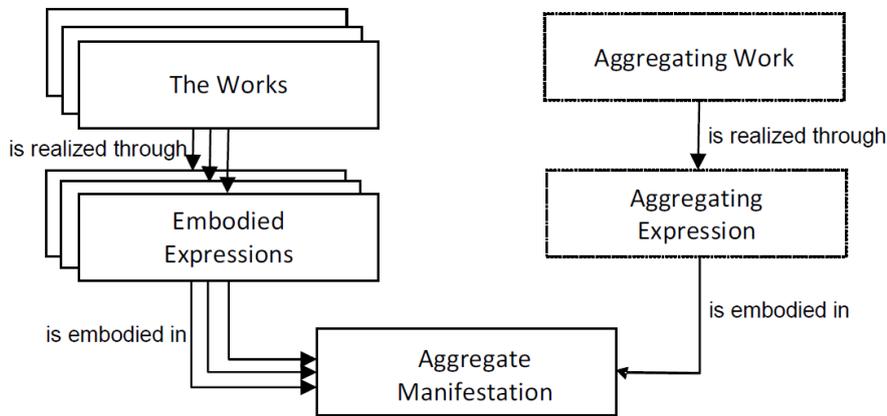


図 3 : 集合表現形の一般的なモデル

集合的な表現形は、すべて、集合化著作に対する集合化表現形 (aggregating expression) を具体化したものである。しかし、集合化表現形は、それぞれを区別して書誌的に識別するほど重要とみなされる場合もあれば、重要とみなされない場合もある。多くの場合、Grisham の小説の例のように、集合化著作それ自体は書誌的な識別や記述が必要とされるほど重要とはみなされない。ただし、集合化著作が重要視され書誌的な識別が必要とみなされる場合もある。このモデルには、いかなる場合でも集合化著作を記述することができる柔軟性がある。集合化著作が最初は識別されなかった場合も、適切とみなされれば、後になってから記述することができる。

FRBR 修正案の提案

FRBR モデルにおける集合表現形の見方を明確化するために、まず、FRBR 報告書の 3.3 節 (p.29) を次の新しい 2 つの節に置き換える必要がある。

3.3 集合的実体

3.2.1 から 3.2.4 までの節で使われた事例は、単一の表現形を具体化した複数の表現形を示す実体群（著作、表現形、表現形、個別資料）を表現している。モデルの構造は、複数の表現形をもつ複数の表現形が 1 つの集合的実体として捉えられることをも許容している。図 3.1 と解説文は、明瞭に、単一の表現形には複数の表現形が含まれることを認めている。これは、第 1 グループの実体群の間では唯一の多対多関連である。すなわち、単一の表現形は単一の著作しか実現できず、単一の個別資料は単一の表現形しか例示できないが、単一の表現形は複数の表現形を具体化することができる。単一の集合表現形という実体は、複数の表現形を具体化している単一の表現形のことである。

表現形の中に境界を設ける基準には、複数の表現形を具体化する表現形を含む物理的形式の側面は含まれない。集合表現形として具体化された表現形との境界は、個別に具体化された表現形の境界と同じである。結果としてできた表現形は、改訂または変更されない限り、他の表現形を加えて具体化された場合も、新しい表現形とはみなされない。Shakespeare の *Romeo and Juliet* の英語の原文は、個別に出版されても、Shakespeare の作品集の一部として出版されても、同一の表現形である。

集合表現形には様々な種類があるが、最も一般的な種類は (1) 表現形の集合コレクション、(2) 増補による集合表現形、(3) 並列的表現形の集合表現形である。コレクションとは、独立して作成された複数の表現形の集まりで、単一の表現形にまとめられて出版されたものである。その例には、雑誌（記事の集合物）、単一の巻にまとめられて出版された複数の小説、独立して執筆された章で構成される図書、音楽 CD（個々の歌唱の集合物）、アンソロジーなどがある。増補とは、典型的には、単一の独立した著作に 1 つ以上の従属的な著作が追加されたものである。従属的な著作はオリジナルの著作と一体をなすものではない。増補は、単一の表現形に序文や序論、挿図、注釈、用語集などの追加資料が加えられたときに作られる。並列とは、同じ著作の異なる表現形を具体化した集合表現形を指し、例えば、多言語環境で出版された製品マニュアルや政府文書、ウェブサイトなどがある。

集合表現形を創り出す知的な取組、例えば選定や編成の判断などは、明らかに知的・芸術的創造である。したがって、それ自体が著作、つまり集合化著作として識別される特別な種類の著作として捉えられる。この集合化著作は、複数の独立した表現形の集合を 1 つの集合表現形に変形するためのフレームや接着剤、綴じ、接合材とみなすことができる。集合表現形の形成には何らかの知的な取組が必要となるため、集合表現形が形成される場面では必ず集合化著作が作られる。この取組は、既存の 2 つの小説を合わせて出版する場合のように比較的簡単にできるものかもしれないし、単なる表現形の集まりを超えた集合表現形を生み出す大規模な取組かもしれない。テキスト資料の場合、この取組には取り扱うテーマの決定や寄与者の選定、レビューや編集という貢献が含まれる。集合化著作は、記録に値するほど重要とみなされる場合もあれば、みなされない場合もある。

3.4 構成要素

モデルの構造上、第1グループの実体群は構成要素や構成部分を持つことができる。著作は、知的・芸術的に別々の構成要素（例えば、レポートの1章、地図の一部、レポートの表など）で構成されるかもしれない。このモデルの目的から、構成要素レベルの実体は、それを統合的な単位レベルの実体と同じように扱うことができる。つまり、構成要素レベルの実体は、統合的な単位レベルの実体と同じ用語で定義され、同じ特徴を共有し、統合的な単位レベルの実体と同じ方法で互いに関連づけられる。5.3.1.1では、全体／部分関連にかかわる構成的実体の情報を追加で提供している。

他節における追加的な修正も役立つが、上記の変更によって、集合体現形がFRBRモデルの一般原則と矛盾なくモデル化されていることを十分に示すことができる。

この案とは別に検討したアプローチは、付録Bに記載している。

結論

ここで提案したアプローチは、表現形と体現形間の関連に由来する。FRBR報告書の図3.1とそれに続く説明文は、単一の体現形が複数の表現形から成ることを明瞭に認めている。これは、第1グループの実体群の間では唯一の多対多関連である。すなわち単一の表現形は単一の著作しか実現できず、単一の個別資料は単一の体現形しか例示できないが、単一の体現形は複数の表現形を具体化することができる。表現形と体現形の間にある多対多関連を基礎として、集合体現形は複数の表現形を具体化した単一の体現形として定義することができる。このような集合体現形の定義は、“書体やページレイアウトのような、著作の知的・芸術的実現に不可欠ではない物理的形式の側面を除外する”という表現形の定義との整合性が担保されるものである。作製工程の中で重要でない変更が加えられたり、表現形が他の表現形と組み合わせられたりしても、新たな表現形が作られるわけではない。

ここで提案したアプローチは、集合体現形あるいは集合体現形とみなされる可能性のある多種多様な体現形によって検証を行った。検証の結果、このアプローチは、次のように評価できる。(1) 表現形と著作の整合性を担保する、(2) 理解と適用が比較的容易である、(3) FRBRモデルと矛盾がない。

Reference

- 1) *Functional Requirements for Bibliographic Records*. Final Report. Approved by the Standing Committee of the Cataloguing Section on September 1997 as amended and correct through February 2009.
http://www.ifla.org/files/cataloguing/frbr/frbr_2008.pdf (Accessed July 10, 2011)
- 2) *FRBR in 21st century catalogues*, Invitational Workshop, 2-4 May 2005, Dublin,

Ohio, USA,

<http://www.oclc.org/research/activities/past/orprojects/frbr/frbr-rkshop/program.htm>
(Accessed July 18, 2011).

- 3) Bennett, Rick, Brian F. Lavoie, Edward T. O'Neill. "The Concept of a Work in WorldCat: an Application of FRBR", *Library Collections, Acquisitions, & Technical Services*, Vol. 27, 2003.
- 4) *Functional Requirements for Bibliographic Records*. Final Report. Approved by the Standing Committee of the Cataloguing Section on September 1997 as amended and correct through February 2009.
http://www.ifla.org/files/cataloguing/frbr/frbr_2008.pdf, p. 5. (Accessed July 10, 2011)
- 5) Ibid, p. 19.
- 6) Ibid, p. 19-20.
- 7) Ibid, p. 21.
- 8) IFLA Working Group on the Expression Entity. "Amendment 1998-1", 2007.
<http://archive.ifla.org/VII/s13/frbr/amend-1998-1-clean.pdf> (Accessed 7-11-11)
- 9) *Functional Requirements for Bibliographic Records*. Final Report. Approved by the Standing Committee of the Cataloguing Section on September 1997 as amended and correct through February 2009.
http://www.ifla.org/files/cataloguing/frbr/frbr_2008.pdf, p. 19-20. (Accessed July 10, 2011)
- 10) Ibid, p. 20.
- 11) Ibid, p. 14.

付録A：集合体現形の事例

カタログが観察できるのは個別資料のみである。そのため、個別資料の特性から第 1 グループの他の実体の特性を推測しなければならない。個別資料を調べた後で、体現形の属性を特定することは比較的容易である。以下の事例で取り上げた情報資源は個別資料であるが、一般に、特定された属性はその体現形にも適用される。

WG は、集合体現形を理解するために十数種類の事例について詳細な分析を行った。そして、その分析のプロセスが非常に有益であることを発見した。これらの事例によって、WG が共通の見解を持つ部分とそうでない部分が明らかになるとともに、様々なアプローチの長所と短所が判明し、WG は集合体現形のモデルを改良することができた。

ここでは、WG が検討した事例のうち、本モデルの理解を助ける 4 つの事例を掲載する。これらは、それぞれ異なるタイプの集合体現形の事例である。これらの事例がすべての種類の集合体現形を表しているわけではないが、一般的な集合体現形の種類とともに、ここで提案するアプローチによって集合体現形がどのようにモデル化されるかを示している。なお、事例に伴う図では、著作は白い四角で、表現形は灰色の四角で示されている。

掲載する事例は、以下の 4 つである。

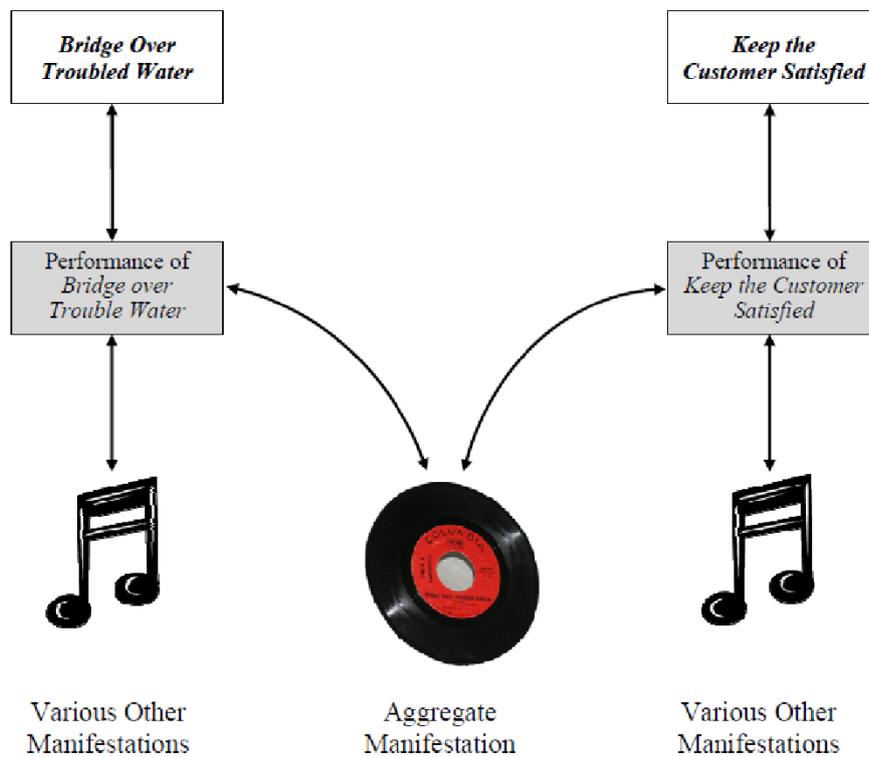
- 事例 1. *Bridge Over Troubled Water*—表現形の集合コレクション（重要な集合化著作を含まないケース）
- 事例 2. *Understanding FRBR*—表現形の集合コレクション（重要な集合化著作を含むケース）
- 事例 3. *Expedition of Humphry Clinker*—増補による集合体現形
- 事例 4. *DVD Player Owner's Manual* —同一著作に関する並列的表現形の集合体現形

事例 1: *Bridge Over Troubled Water* (*Bridge Over Troubled Water* と *Keep the Customer Satisfied* のコンピレーション)

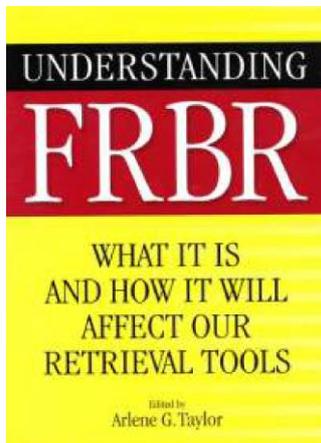


このシングルは 1970 年 1 月 26 日に発売されたもので、B 面には *Keep the Customer Satisfied* という曲が収録されている。A 面の曲である *Bridge Over Troubled Water* はグラミー賞の年間最優秀楽曲を受賞し、この 2 つの音源はアルバム *Bridge Over Troubled Water* に収録された。このアルバムは当初ビニール LP として発売されたが、その後カセット、8トラック、CD でも発売され、最近ではブルースペック CD としても発売された。2001 年には、*Bridge Over Troubled Water* の別録音を含む 2 曲のボーナストラックを収録した CD も再発売されている。*Bridge Over Troubled Water* は、Simon & Garfunkel の大ヒット曲アルバムにも収録されている。大ヒット曲アルバムの中には *Bridge Over Troubled Water* と *Keep the Customer Satisfied* の両方を収録したものもあれば、*Simon & Garfunkel – Greatest Hits* のように、*Keep the Customer Satisfied* を収録していないアルバムもある。それぞれの曲は、今や Amazon や iTunes などのオンラインショップで購入できる。オンラインショップの登場以前は、両曲とも単体では発売されていなかった。

本レポートで提案するアプローチを適用すると、この「シングル」は 2 つの異なる表現形を具体化したものと捉えられる。2 つの表現形のうち 1 つは *Bridge Over Troubled Water* の演奏であり、もう 1 つは *Keep the Customer Satisfied* の演奏である。この捉え方を表現した図を、以下に示す。これらの表現形も、それらが実現させている著作も、いずれも集合体現形ではない。これらと同じ表現形は、この他にも、数多くの集合的な体現形 (aggregate manifestation) として具体化されている。原理的には、この体現形には集合化著作が含まれる。しかしこの場合、この集合化著作は、それ自体に書誌的な識別が必要とみなされるほど重要とは考えられない〔訳者注:そのため、以下の図には集合化著作 (aggregating work) が描かれていない〕。



事例 2 : *Understanding FRBR*



Taylor による *Understanding FRBR: What It Is and How Will It Affect Our Retrieval Tools* という図書は、独立して書かれた 13 の章からなる編集物である。すべての章に共通するテーマがあるが、各章は異なる著者によって書かれた。編者である Taylor は、各章のテーマを決め、執筆者を募り、編集上の指導を行い、序文を書いたが、各章は独立した著作である。

目次

Introduction

Chapter 1—An Introduction to Functional Requirements for Bibliographic Records (FRBR) *Arlene G. Taylor*

Chapter 2—An Introduction to Functional Requirements for Authority Data (FRAD) *Glenn E. Patton*

Chapter 3—Understanding the Relationship between FRBR and FRAD *Glenn E. Patton*

Chapter 4—FRBR and the History of Cataloging *William Denton*

Chapter 5—The impact of Research on the Development of FRBR *Edward T. O'Neill*

Chapter 6—Bibliographic Families and Superworks *Richard P. Smiraglia*

Chapter 7—FRBR and RDA: Resource Description and Access *Barbara B. Tillett*

Chapter 8—FRBR and Archival Materials: Collections and Contest, not Works and Content *Alexander C. Thurman*

Chapter 9—FRBR and Works of Art, Architecture, and Material Culture *Murtha Baca and Sherman Clarke*

Chapter 10—FRBR and Cartographic Materials: Mapping Out FRBR *Mary Lynette Larsgaard*

Chapter 11—FRBR and Moving Image Materials: Content (Work and Expression) versus Carrier (Manifestation) *Martha M. Yee*

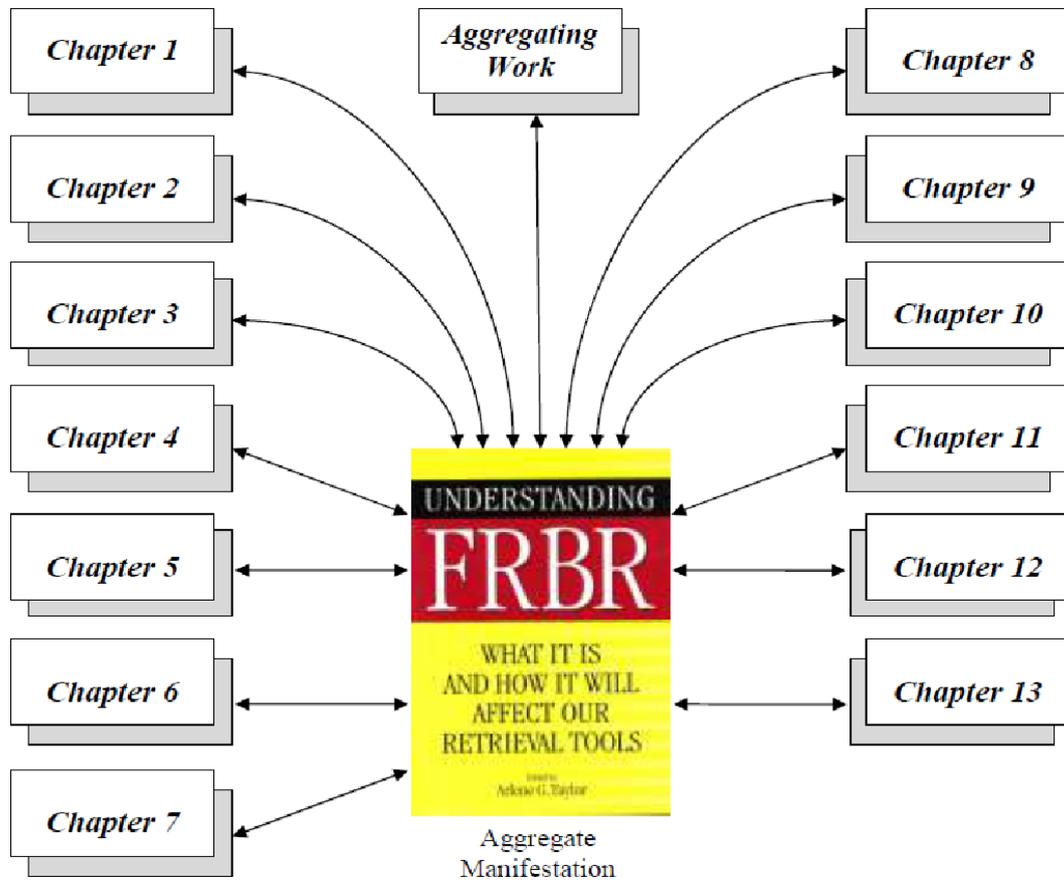
Chapter 12—FRBR and Music *Sherry L. Vellucci*

Chapter 13—FRBR and Serials : One Serialist's Analysis *Steven C. Shadle*

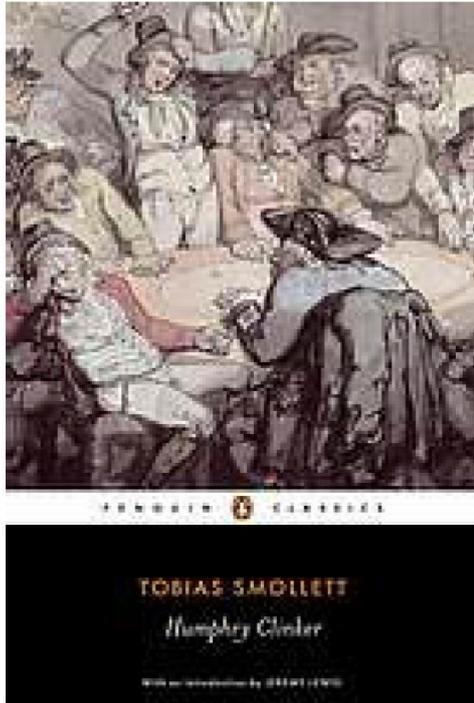
Index

About the Editor and Contributors

Understanding FRBR: What It Is and How Will It Affect Our Retrieval Tools において、13 の章はそれぞれ異なる表現形を持つ著作である。集合化著作には、編者の知的貢献を示すという意味合いもある。集合化著作には、扱うべきテーマの決定、執筆者の募集、原稿の編集、序文の執筆、索引の作成、その他関連する作業に必要な知的な取組が含まれている。編者は、集合化著作に対する責任に加えて第 1 章も執筆しているが、これら 2 つの貢献は個別の著作となる。最初の例とは異なり、この集合化著作は重要であり、個別に書誌的に識別する必要がある。



事例 3 : *Expedition of Humphry Clinker*



Contents

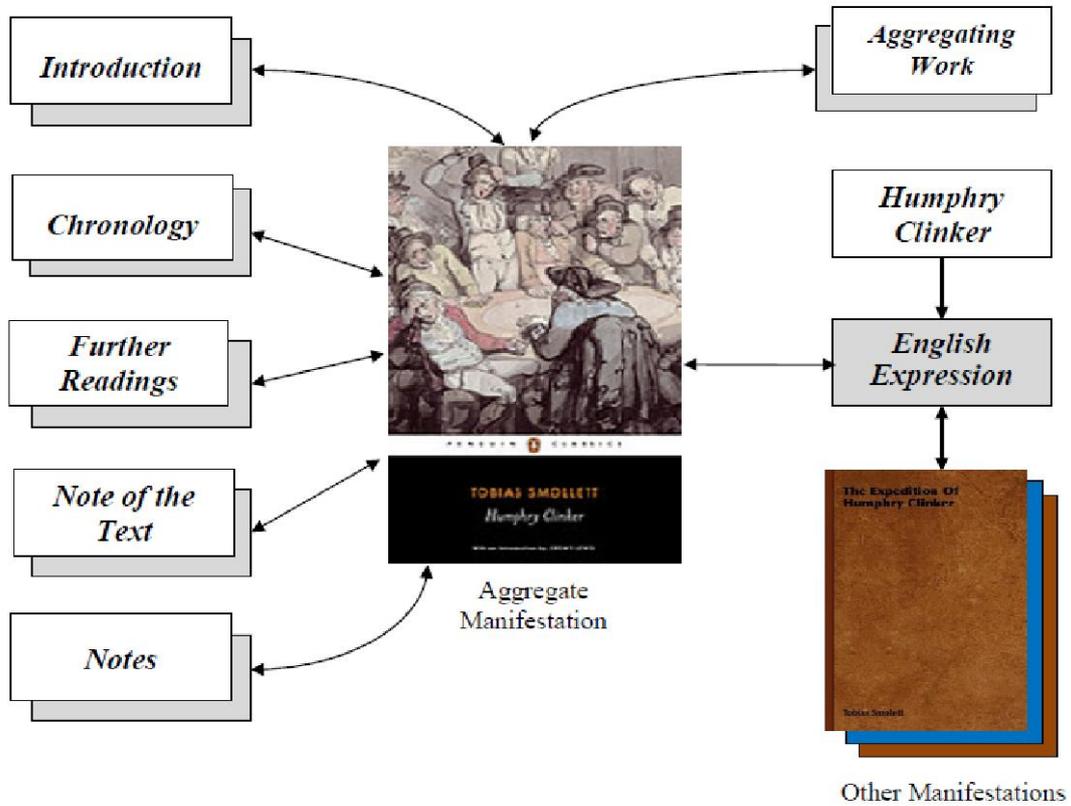
Introduction by Jeremy Lewis	vii
Chronology	xxviii
Further Reading	xxxix
A Note on the Text	xxxv
HUMPHRY CLINKER	7
VOLUME ONE	9
VOLUME TWO	133
VOLUME THREE	257
Notes	393

1771 年に出版された *The Expedition of Humphry Clinker* は、Tobias Smollett の最後の小説で彼の最高傑作とされている。この小説は広く再版され、200 以上の異なる表現形が確認されている。また、この作品は FRBR の観点からも広く分析されている¹⁾。翻訳版を除けば、テキストは最初に出版されたときから大きく変わっていない。この Penguin Oxford Classics 版は、挿絵がない点以外は、この著作の増補版の非常に典型的な事例である。

Humphry Clinker の多くの表現形には、序文、前書き、挿絵、注釈などが含まれている。少なくとも 9 人の挿絵画家が様々な表現形に貢献したことが知られており、20 人以上の編集者が序文、前書き、注釈を加えている。この 2008 年版の Penguin Oxford Classics 版は、増補版がもつ多くの側面を示している。Smollett の小説のオリジナルテキストには、(1) Jeremy Lewis による序文、(2) Jeremy Lewis による年表、(3) Jeremy Lewis と Shaun Regan による参考文献、(4) Angus Ross によるテキストに関する注釈、(5) Shaun Regan による注釈が追加されている。これら 5 つの増補は、それぞれ個別に著作権で保護されている。Lewis と Regan による増補が過去に出版されたことを示す証拠はみつからなかったが、Angus Ross のテキストに関する注釈は、過去のいくつかの増補版にも掲載されていた。

FRBR における表現形の説明を考慮すると、これら 5 つの増補はそれぞれ独立した表現形をもつ別の著作と捉えられる。また、Shaun Regan は編集者としても認識されており、編集者として注釈や参考文献の執筆以上の貢献をしたと考えられる。それゆえ、集合化著作が作成される。その結果、この集合表現形は、小説そのもの (*Humphry Clinker*) の表現形、5 つの増補の表現形、集合化著作の表現形という 7 つの表現形が集まったものとなる。

しかしながら、これらの表現形のすべてが、書誌的な記述を必要とするほど重要であるとは限らない。



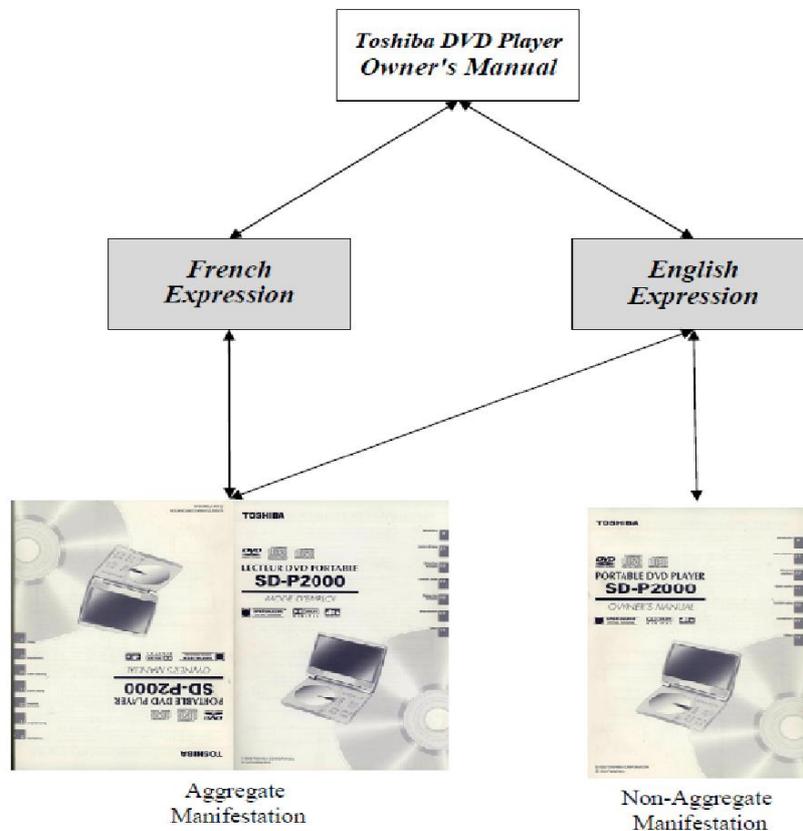
1) O'Neill, Edward T., "FRBR: Functional Requirements for Bibliographic Records: Application of the Entity-Relationship Model to Humphry Clinker", *Library Resources & Technical Services*, 2002, Vol. 46, No. 4, p. 150-159.

事例 4 : DVD Player Owner's Manual



この東芝 DVD プレーヤーのマニュアルは、英語とフランス語の 2 つのマニュアルから構成されるが、物質的には 1 冊の本となっている。1 冊の本に 2 つの表紙がついている。英語とフランス語の間には完全な並列性があり、それぞれ 82 ページの長さがある。言語を除いて 2 つの表現形は同等であるようにみえる。英語のマニュアルは、そのコピーが東芝のウェブサイトにも別文書として掲載されている。このマニュアルは、さらに別の言語でも出版されている可能性がある。

この事例は、同一著作の 2 つの表現形（英語の表現形とフランス語の表現形）が同一の体現形に具体化されているものである。



付録B

集合体現形に関するワーキンググループは、その審議の中で、**aggregate**^{*}について、様々な定義とモデル化に関わる様々なアプローチを検討した。この付録では、〔訳者注：最終的に採用された、レポート本文で示されたものとは〕別のアプローチを説明する。

※訳者注

aggregate という組織化概念に対して、レポート本文の日本語訳では、*IFLA LRM* 報告書の日本語訳書¹⁾に揃えて「集合体現形」という訳語を当てた。しかし、この付録Bは、本文とは別のアプローチを用いて **aggregate** を体現形と切り離した形でモデル化しているため、「集合体現形」という訳語は与えず「**aggregate**」と原綴のままで表記する。なお、モデルで定義される概念ではなく一般的な用語法の意味合いで **aggregate** を使っている場合は「集合物」と表現し、両者を訳し分けた。

1) *Pat Riva, Patrick Le Bœuf, Maja Žumer* 著 和中幹雄, 古川肇訳者代表『*IFLA* 図書館参照モデル：書誌情報の概念モデル』樹村房, 2019. 104p.

別のアプローチ

近年、マッシュアップやセマンティックウェブのリンクトデータ機能のために、コンテンツをまとめるという意味合いの「**aggregate**」という用語に注目が集まっている。FRBR とその次世代となる書誌的宇宙の概念モデルは、**aggregate** とは何かという従来の見解に加えて、将来の見解をも包含する柔軟性を持たなければならない。

従来の目録では、*IFLA* の国際標準書誌記述 (ISBD) に従って、**aggregate** とその構成要素について、次のようなやり方で書誌的記述を記録していた。まず‘全体 (whole)’を記述し、「数量」(特に付随する著作のため)への追加や「内容注記」のエレメントを用いて‘部分 (part)’との関連を示唆する。あるいは、分析的記述として‘部分’を記述し、それと‘全体’との関連を「シリーズ表示」や「注記 (“in analytics” note)」エレメントによって記録する。加えて、多くの目録規則では、アクセスポイントに関する規則の中に‘全体’を記録する副出記入に関する規則が含まれていた。従来の目録において、全体とその部分が指す「範囲」は曖昧であり、記述対象となる知的・芸術的コンテンツ、特定の物理的キャリア、あるいは記述されるあらゆる事物の集合を示すことができた。

このレポートの本文では、著作・表現形・体現形・個別資料 (第1グループの実体群) の **aggregate** とその構成物に焦点を当てている。そしてここでは、検討の対象を限定し、WG が着目した表現形と体現形の間にある固有の関係、すなわち複数の表現形が1つの体現形に具体化されるというタイプの集合物のみを扱っている。しかしながら、この付録Bでは、FRBR および FRBR が表現する書誌的宇宙においては、より多くの集合物と構成物 (component) が存在することを喚起する。FRBR ファミリーの3つの概念モデルを統合

するに当たり、**aggregate** が第 1 グループ以外の実体にも適用されるものであることを認識すべきである。例えば、家族 (**family**) の集合は、複数の家族が統合 (部分あつての全体) したものと捉えられる。また、個人 (**person**) (あるいは **persona**) は、共同ペンネームを使っている場合、実際には複数の人間が集まったものかもしれない。団体 (**corporate body**) も、他の団体と合併した集合である可能性がある。場所 (**place**) も部分的な場所の集合として、概念 (**concept**) も構成物から成るものとして捉えられるかもしれない。物 (**object**) や出来事 (**event**) についても同様である。これらのバリエーションはすべて、**FRBR** の抽象的なモデルにおいても許容されるべきである。そこで、この付録 B では **WG** のうちの半数のメンバーの考え方を提示する。この考え方は、**aggregate** を、**WG** が焦点を当てた表現形-一体現形に固有の関係性に限定せずに、他にも多くのタイプの集合物や構成物が存在することに配慮する立場に基づくものである。特に、この考えを取るメンバーのうち幾人かは、レポート本文で提案された **FRBR** の修正案に賛成していない。

概念モデルにおける集合的実体の定義

FRBR で「**integral units** (統合的な単位)」、「**aggregate entity** (集合的実体)」、「**component entity** (構成的実体)」という用語が選ばれたのは、特殊な専門用語ではなく、一般的な英語の用語法に沿うことを意図したからである。つまり **FRBR** における「**aggregate entity**」は、あらゆる単位の集まりを含むことを意図しており、それらの単位は「**component entity**」である。運用上の一般的な定義は、次のとおりである。

aggregate entity は、2 つ以上の構成物 (部分) との間に“全体/部分”関連 (“**whole/part relationship**”) がある場合の“全体”に当たるものである。

全体と部分は、“含む/含まれる (**contains/contained by**) ”の関連で結び付けられている。この関連は、“部分をもつ/部分である (**has part/is part of**) ”と表現することもできる。つまり、集合的実体を考える場合、1) 全体 (集合物)、2) その部分 (構成物)、3) それらの間の全体/部分関連が存在する。

何を「構成物」とみなすかは、書誌記述を行う機関の方針または視点に影響を受ける、主観的な判断である。仮に、ある機関が集合物を構成する特定の構成物を認識し、それらを別々に記述することを望むなら、**FRBR** モデルはその視点に対応する必要がある。同様に、ある機関が個々の構成物を無視し統合的な単位として資料を扱うことを望むなら、**FRBR** モデルはその視点にも応じる必要がある。

FRBR の概念モデルには、このような多くの視点に対応できる柔軟性が必要であることを忘れてはならない。

レポート本文で示されていたように、資料のコンテンツにまつわる **aggregate** の有用な種類分けを行うと、次のように分類できる。1) 異なるコンテンツを集めたもの (表現形の

集合コレクション)、2) 主要な表現形を他の従属的な部分で増補したもの(増補を伴う表現形)、3) コンテンツを1つまたは複数の言語に翻訳してパッケージ化したもの(並列的表現形)。しかしながら、これらのカテゴリーが網羅的でないことは、事例を探ってみると明らかである。

レポート本文では、WGの担当範囲にとどまるために、**aggregate**の定義を複数の表現形を具体化したものに限定した。しかしまた、私たちは、**aggregate**がどのような実体にも存在しうることも認めた。例えば、個別資料の事例を考えると、個別資料は合刻して新しい個別資料が形成される場合があり、それは集会的な個別資料とみなされる。この集会的な個別資料は、FRBRの図では現在省略されている(この省略は、FRBRが、個別資料レベルで多くを行う必要がない全国書誌機関の目録作成に焦点を当てたものである、という事実に起因している)。同様に、いくつかの事例は複数の著作から成る著作とみなすことができる(アーカイブのフォンドや、様々な著者による著作(記事)で構成されている逐次刊行物など)。著作には、その著作自身の集合タイトル(**collective title**)を持つものがある。複数の著作から成る著作(複数の個別資料から成る個別資料ではない)は、FRBRの研究会では認識されていたが、最終報告書の図からは省略された。FRBRファミリーの3つのモデルを統合した版では、この部分を省略せずに示すことが期待される。

FRBRにおける **Aggregates** の範囲

FRBRは、書誌的宇宙の理論的・概念的なモデルであり、このモデルに基づいたシステムのデータモデルを開発する場面で使用される。このモデルにおける実体、関連および属性は、書誌的宇宙のためのサロゲート(代用物)という観点から捉えることができる。図書館は、この書誌的宇宙を現実のモノ(情報資源、行為主体、概念など)とそれらのつながり(関連)に関する記述を通じて提示する。FRBRに基づくアプリケーションは、記述対象とする特定の学問領域に適したこのモデルを基に構築されることが期待されている。

FRBRでは、3.2.2, 3.3, 5.3.1.1, 5.3.2.1, 5.3.4.1, 5.3.6.1で、集合物と構成物について明確に説明している。FRBRの3.3節(2009年版FRBRのp.29)の説明は次のとおりである。

本モデルにおいて、集合(**aggregate**)レベルないし構成レベルにある実体は、統合的な単位レベルの実体と同じような働きをする。すなわち、それらは同じ用語で定義され、同じ特性を共有し、また、統合的な単位レベルの実体と同じ方法で互いに関連づけられる。5.3.1.1, 5.3.2.1, 5.3.4.1および5.3.6.1の各節では、全体および(または)部分の関連という文脈において、集会的実体および構成的実体について補足的な説明を行っている。

この説明は、モデル内のいかなる実体にも適用可能なように、意図的に一般化されている。

また、この種の実体が、その識別特性や関連性において他の実体と異なる振る舞いをするものではないことも指摘している。

FRBR 報告書の第 5 章における全体／部分の関連は、著作 (5.3.1.1)、表現形 (5.3.2.1)、体現形 (5.3.4.1)、および個別資料 (5.3.6.1) に適用される。また、全体／部分の関連は、FRAD (Functional Requirements for Authority Data) にもみられる。全体／部分の関連は特に著作に対して適用されるが、概念モデルのあらゆる実体に適用される可能性がある。

概念モデルは、このような集合物の存在を許容し、集合物同士や構成物同士の共通性を属性や関連で表現する必要がある。特定のアプリケーションにおいては、必要に応じて、そのコレクションに必要な運用ルールを追加すればよい。

第 1 グループの実体に関して、長年にわたり、図書館はコンテンツの集合物と物理的なキャリアの集合物の存在を認識してきた。我々図書館員は、それらが具体化した体現形や個別資料を通じて著作や表現形を知っているのと同じように、自分の図書館が収集した特定の個別資料を通してこうした集合物を知っている。しかしながら、時には、図書館は集められた実体を単一物として扱い、書誌記述において個々の構成要素を無視するという判断を下すこともある。FRBR の概念モデルは、このような異なる扱いを許容する。特定のシステムや運用ルールに FRBR を適用する際、ある構成要素を宣言／識別／記述するか、もしくは無視するかのいずれかを選択することが可能となる。

いいかえれば、全体の実体を統合的な単位として捉えることもできるし (例：複数の創作者による共同的な著作から構成される著作を、統合的な単位で扱う)、全体／部分関連における全体とその構成物として捉えることもできる (例：三部作の物語。三部作を全体、三部作の個々の物語、つまり構成物である著作を部分として扱う)。アプリケーションに実装する際は、構成物となりうる実体を特定するか (例：それぞれ別の書誌レコードとする、個別の著作/表現形として分析する、内容注記に構成物のリストを記録する、分析的副出記入を作成するなどの工夫をする)、特定しないか (例：本文の挿図や序文、索引といった構成要素は、目録作成機関にとって特に有用性や意味がある場合は除き、通常は特定せず、書誌記述では無視する) という 2 つの選択肢を選ぶことができる。あるアプリケーションが集合物や構成物となりうる実体の扱いをどのように判断したかに関わらず、それらは FRBR においてモデル化され、必要に応じて適用可能となる。

FRBR の概念モデルは、図書館が収集するものに関する書誌的宇宙を見る方法を示している。それは 1 つの見方に過ぎないが、図書館のコミュニティと共鳴するものであり、かつダブリンコアやセマンティックウェブといった他のコミュニティとも共鳴するものである。

(はしづめ あきこ 実践女子大学短期大学部)

(こばやし みき)

2023 年 10 月 15 日受理